日本語學研究 第63輯(2020. 3. 20. pp.197~210)　　http：//dx.doi.org/10.14817/jlak.2020.63.197

# 中国語母語話者の日本語書き言葉の誤用研究序説

李東哲*

〈 Abstract 〉

IIntroduction to the error study of Japanese sentences written by Chinese native speakers

In the process of learning a foreign language, mistakes are inevitable. Therefore, it is very helpful for learners to find out and analyze these mistakes in time and apply them to foreign language education practice and theory. Further, learning a foreign language is closely related to the learners' native language, and it is thus advisable to explore the learning methods of a foreign language in consideration of the learners' native language.

This paper discusses errors in Japanese education in China. However, it is not a specific error analysis, but is a discussion on what errors Chinese native speakers have made in the process of using Japanese, how these errors are specifically manifested in Japanese education, and how these can be positioned. The paper describes these issues based on the "Secondary misuse" hypothesis and "Suspected misuse" hypothesis. In my opinion, the theoretical suitability of these two hypotheses is yet to be explored, especially in Japanese education in China. These two hypotheses can nonetheless be established completely, and thereby can be used as theoretical bases for error analysis researches in future.

Field：Japanese education
Keywords：Japanese education in China, "secondary misuse", "suspected misuse", Japanese errors, Error analysis

## 1. 問題提起

「日本語誤用・日本語教育学会」1)のホームページにリストアップされている「中国語母語話者日本語学習者にかかわる誤用研究の主な文献」には1978年から2014年までの38年間にわたって日本または中国で公刊された誤用に関する文献が161件載っており2)、長友(1990)にも1970年以降日本語で書かれ

＊ 新羅大学校 専担教員、日本語学・日本語教育

1) この研究学会は2006年度に「日中言語研究と日本語教育web研究会」として発足し、2014年「日本語誤用と日本語教育研究会」に学会名称を変更後、2018年度に学会として正式に出帆したという(現在事務局副局長を務めている朴麗華氏による)。2019年12月現在、学会本部は関西学院大学国際学部于康研究室内(会長 于康氏)。ホームページアドレス：http://yukang.org/index1.html。

2) 161件の文献の中には、実際中国語母語話者の日本語学習者とはあまり関係のない誤用に関する書籍や論文、ひいては日本語母語話者の中国語学習者にかかわる誤用研究も少なくないので厳密な意味で言うならば「日本語・中国語にかかわる誤用研究の文献」と命名すべきものである。

Nagoya Gakki

た誤用分析に関する文献が100篇近くリストアップされている。これらのリストには必ずしもこれまでの誤用文献すべてが網羅されているわけではないが、リストを通して日本語非母語話者が日本語を学習し、その学習した発音、単語や文法知識などを借りて日本語である意思を表現しようとする場合、間違って話したり、書いたりするという誤用がどれくらい頻繁に生じるかということがわかると同時に、日本語教育分野における誤用問題への取り組み実態の一端をもうかがうことができる。

ところで、「誤用」(error)と呼ばれるこのような言い間違いや書き間違いとそれについて研究したり、分析したりする「誤用研究」または「誤用分析」(error analysis)に関わる問題は実に多い。このような問題について市川保子では[3]、①誤用とは何か、②誤用の要因、③誤用には段階がある、④誤用の判定基準にも段階がある、⑤誤用の種類、⑥訂正(correction)ということ、⑦誤用研究の目的の７つに分けて簡明に説明しているが、誤用研究または誤用分析全般に関して言えば、確かに納得のいく説明である。

半面、これらの問題をある特定の国の特定の言語を操る日本語学習者または日本語教師に限定して言えば、その状況はいささか変わってくる。例えば中国の場合、日本語学習者は言うまでもなくほとんど中国語母語話者であり、日本語を教える日本語教師も大半は中国語母語話者であるが、初級や中級レベルまでの日本語ならいざ知らず、上級以上になると教わる側と教える側の境界線が引けるかどうかという問題がある。というのは、いくら日本語のレベルが高い日本語教師であってもしょせん母語は日本語ではないし[4]、実際教育現場やその他の場において、日本語教師の誤用もまま見られることだからである。そうすると、必然と李(2017)で指摘されているような「二次誤用」[5]、つまり辞書などの参考書や学習書に出てくる間違った日本語表現や教師の間違いを学習者が鵜呑みにしてそのまま使ってしまうというような問題が生じてくる可能性が多分にある。次は、中国語母語話者の日本語教師または研究者による誤用研究または誤用分析の可能性である。誤用研究または誤用分析の最初の段階はまず誤用判定であると言えるが、日本語母語話者の場合はよっぽど込み入った表現ではない限り、経験的に大抵直感でそれが誤用かどうかの判断ができるが、日本語非母語話者の日本語教師や研究者は必ずしもその正否について的確に判断できるとは限らないし、その正否を判断できる確実な根拠も見つけられない場合が少なくない。３つ目は日本語母語話者と日本語非母語話者の誤用にどのような特徴と違いがあるかということである。誤用というのは単に非母語話者に限って犯すものではなく、母語話者にもしばしば見られる言語現象だからである。もう１つは、日本語非母語話者による他の言語の日本語への翻訳・通訳である。一般的に翻訳・通訳は誤用研究の範囲に属していないと考えられがちであるが、日本語非母語話者がある言語を日本語に訳す場合に間違った日本語表現を使うとなると、実質的には誤用と変わらない。それはある程度の言語知識を有する人ならば自分の母語への理解を間違えて誤訳するということはほとんどあり得ず、結局外国語の表現を間違えて使ってしまうからである。

このように、とりわけ日本以外の国における日本語の誤用の取り扱いには案外手こずる様々な問題が多い。本稿ではとりあえずこれまでにあまり言及されなかった上記の中国における中国語母語話者の日

---

3) この資料はインターネットで見つかったが、その出所は不明である。しかし、「日本語・日本語教育を研究する 第16回日本語誤用研究」というテーマから推して、おそらくシリーズ講座か、個人のホームページに掲載されている文であろう。

4) 白川(2007)では「非母語話者である以上、相当程度に習得が進んだ学習者であってもまったく誤用をせずに日本語を使用することは困難である」(p. 177)と指摘されているが、これは結局、非母語話者は日本語母語話者のように日本語を使用することはほとんど不可能であるという意味に取れなくもない。

5) この概念は李(2017)によって初めて用いられた用語である。詳しく同文献を参照されたい。

www.kci.go.kr

本語の誤用と誤用分析をめぐる諸概念と問題について新たな知見から見直し、それでもって中国における日本語の誤用研究の理論的土台としたい。

## ２．日本語の誤用研究概観

歴史的に誤用分析は対照分析(Contrastive Analysis)と中間言語(Inter language Analysis)の中間に位置しているが、対照分析では誤用の原因を第１言語からの干渉(interference)と考え、第１言語と第２言語の間で相違が見いだせる場合、その領域で干渉が起こるとした。しかし、誤用の分類が進むにつれ、予測できない誤用が頻出することが指摘されるようになり、対照分析に疑問が持たれ始めた。それに替わって誤用の組織的検討、つまり誤用分析(Error Analysis)が1960年代後半から精力的に行われるようになった(長友1990：23)。このような研究は当初Corder,S.P.（1967、1971)やEtherton,A.R.B.(1977)などによって始まったが、1970年代後半からは日本でも日本語に関する誤用研究が行われるようになった[6]。しかし、当時はまだ日本政府で私費留学生をほとんど受け入れなかった時代であったこともあり、中国語母語話者を対象にした誤用研究はそれほど活発ではなかったようである。その後、1980年代に入って日本政府が私費留学生を受け入れはじめると[7]、中国からの留学生が「就学ビザ」[8]で堰を切ったように日本語学校になだれ込んでくるとそれに対応すべく、日本語教師や研究者も初めて中国語母語話者の日本語の誤用問題に目を向けるようになった。それに先立つ1980年8月、中日両政府の協議によって北京語言学院[9]で中国の大学日本語教師を養成するための「大平学校」が開校し[10]、そこで５年間主任教授を務めた佐治圭三先生によって、中国語母語話者の日本語の誤用を集めた日本語の誤用研究例文集が上梓され[11]、中国語母語話者の日本語の誤用研究に先鞭が付けられた。

それ以降、中国語母語話者の日本語の誤用を取り扱った日本人研究者の日本語の誤用研究とともに、顧海根・徐昌華(1980)、顧海根(1981、1983)のように、中国人研究者による中国語母語話者の日本語の誤用研究も徐々に行われるようになった。そして、1980年代半ばに胡振平(1986)のような中国人母語話者による日本語の誤用分析に関する著書も出版されはじめ[12]、その後穂積晃子著、顧海根・李強

---

6) 長友(1990)に取り上げられているリストを見ると、数は非常に少ないが1971年からすでに日本語誤用に関する論文が日本で発表されてはいた。しかし、日本における日本語誤用の本格的なスタートは『日本語教育』34号(1978、日本語教育学会)の誤用分析の特集からであると言えよう。その後1980年代初めも日本語の誤用研究に関する論文の多くは『日本語教育』誌で発表されていた。また、佐治(1991)によれば、日本語教育学会の関西における研究活動の１つとして、大阪・京都・神戸に住む人たちを中心に、1976年3月に5つの研究会が作られたが、その１つに「誤用例の研究会」があり、その後もずっと活動が続けられていたという。

7) 1983年中曽根内閣が「留学生受け入れ10万人計画」を打ち出し、日本政府は同年からいわゆる「就学生」として日本語学校の私費留学生を正式に受け入れ始めた。

8) 日本の法務省では、私費留学生を受け入れはじめた当初、大学の留学生別科や学部生は「留学ビザ」、日本語学校の留学生は「就学ビザ」を発給したが、平成22年7月から一本化していずれも「留学ビザ」を発給するようになった。

9) 1996年6月「北京語言文化大学」と改名し、2002年から簡約して「北京語言大学」と呼ばれている。

10)「大平学校」という名は日本での通称名で、正式名は「在中国日本語研究センター」、中国における通称名は「大平班」、正式名は「日語教師培訓班」である。

11)『中国人の日本語の作文に見られる誤用例集』（国際交流基金、1980年）であるが、当時大平学校の教科書として使われていたことがある。

www.kci.go.kr

訳(1987)、徐宝妹・許慈恵(1995)、王忻(2008)へとつながっていった。このほかにも1980年代初期に中国で刊行された『日語知識』[13]や1979年に刊行され、現在も続いている日本語学習と研究の総合専門誌である『日語学習与研究』[14]、そして2000年代以降に中国の各大学や学会によって行われたシンポジウムの論文集にも誤用に関するシリーズ論文と単発的な論文が掲載されていた。

このような研究成果は、実践的に日本語教育現場で大いに利用されていることは言うまでもない。言うならば、日本語教育現場あっての誤用・誤用分析であり、このような誤用・誤用分析はフィードバックして日本語教育においてなくてはならない重要な一部分を担っているという相関関係にある(李2011)。こういう意味で日本語の誤用分析は日本語母語話者を対象にした国語教育ではなく、外国人を対象にした日本語教育によって始まり、発展してきたと言える。

## ３．日本語母語話者の誤用と非母語話者の誤用

日本の国語辞典の説明によれば、「誤用」とは「方法・用法などをまちがって使うこと。また、まちがった使い方」(『明鏡国語辞典』北原保雄編)である。この説明に従えば「誤用」というのは方法を間違ったり、用法を間違ったりすることまたは間違った方法・用法全般についていう語であるととりあえず受け止めたい。すると、前述したように、そもそも言葉の誤用というのは母語または第一言語[15]であろうと、外国語であろうとまったく関係なく、ある特定な言葉を操る過程における共通の現象であると言える。それでこそ、中国では中国語母語話者の中国語の使用の間違い、日本では日本語母語話者の日本語の使用の間違い、英語圏では英語母語話者の英語の使用の間違いというように、それぞれの言語の母語話者の間違った使い方について指摘したり、研究したりしているわけである。この点は、日本で出版されている数多くの日本語誤用に関する本によってもわかる。

ところで、母語または第一言語を間違って使ったりすることと母語または第一言語以外の言葉を間違って使ったりすることを同じ目線で考えることができるかどうか、できないとすればそれにはどのような相違点があり、言語学的にそれをどのように位置づけるべきかという理論的な問題が出てくる。

もちろん、母語または第一言語以外の言葉を学習する際に間違って使う初級や中級の基礎的な段階における誤用とある言語の母語話者が母語または第一言語を使う際に間違った言葉とでは、その違いがはっきり見えてくるからとくに問題にはならないだろう。例えば、日本語非母語話者は「東京ですむ」、「友達を会う」、「いいだから」といったような間違った使い方をよくするが、日本語母語話者な

---

12) 1986年上海訳文出版社出版された胡振平氏編著の『日語病句剖析ニ百例』である。

13) 1983年、大連外国語学院（当時）で創刊された日本語普及のための月刊誌だったが、数年前に『東北亜語言研究』誌に取って代わったのである。

14) 北京経済貿易大学で1979年12月創刊され、いままで40年以上も続いている日本に関する総合学術専門誌である。

15)「母語」と「第一言語」の違いについて「ウィキペディア（Wikipedia）」の「母語」項では「ある人が最もうまく使いこなせる言語を「第一言語」と呼ぶ。ただし、その言語がその人の唯一の母語であるとは限らない。幼少期に複数の言語を身につけることによって母語が複数になることもあるが、完全なバイリンガル（マルチリンガル）は極めて稀で、大抵は複数の母語のうちの一つだけが第一言語となる。また、日常生活で母語以外の言語をもっぱら使用することによって、母語以外の言語が第一言語となる場合もあり、多くの場合、その人が受けた学校教育の教授言語が第一言語になる」と説明している。

ら少なくとも幼児期を過ぎてしまえばこのような言い間違いはしないだろう。しかし、本論の冒頭に出ている「中国語母語話者日本語学習者」といういくつもの漢語名詞をくっつけたひとかたまりの言葉をそのまま１語として認めてもいいのかどうか、「宿題する」や「名が聞こえる」といった表現は適切な日本語表現なのかどうかということになると、一言や二言で言い切れるものでは決してない[16]。

この問題について 金澤(2008)では、言語習得分野 における 言葉に関する誤用を「ミステーク(mistake)」と「エラー(error)」の２種類に分け、「ミステーク」はいわゆるうっかり言い間違いをする一過性の誤用であり、母語話者でも日常的にしばしば起こす間違いで、「エラー」は事柄に関して一貫して間違いを起こす場合であり、外国人の学習者がよく考えた挙句に結局間違ってしまうといった場合に起こるものであると指摘している。また、小柳(2010)でも日本語の母語話者が「日常、日本語を話しているときに口がすべって言い間違ったり、話している途中で気が変わってしまい、文のはじめと文末のつじつまが合わなくなったりする」(p. 054)ことを間違い(mistake)であるとしている。つまり、金澤(2008)も小柳(2010)も母語話者の間違いは「ミステーク」、学習者の間違いは「エラー」という異なる用語で区別しているようであるが、この分け方には確かに一理はある。しかし、この指摘はその内容からしていずれも話し言葉における間違いであって、書き言葉ではない。すると、書き言葉の間違いもこの理論を適用して考えてもいいのかどうかという疑問が持たれる。それに金澤(2008)の「エラー」の概念も若干的確さを欠いているような気がしてくる。それは、とりわけ話し言葉の際に学習者は必ずしもある「事柄に関して一貫して間違いを起こす」わけではないだろうし、「よく考えた挙句に結局間違ってしまう」わけでもないだろうからである。そもそも話し言葉は書き言葉と違ってあまり「よく考え」る余裕がなく、反射的に口をついて出てくるものなのである。だからこそ、母語話者でも「口がすべって言い間違ったり、話している途中で気が変わってしまい、文のはじめと文末のつじつまが合わなくなったりする」わけである。ただ、母語話者の場合は瞬間的に言い間違ってもその場ですぐその間違いに気が付いて言い直したりすることが予想されるが、相対的に非母語話者はそれができない場合が多いのではないだろうか[17]。

それでは、書き言葉においては日本語母語話者と日本語非母語話者の誤用の違いは一体どこにあるのだろうか。近年、ある個別的な言語使用現象について日本語学習者と日本語母語話者との比較研究や藤田(2007、2010)のように、日本語・中国語双方向からの誤用研究が活発に行われているが、このような研究の蓄積によって将来はある特定の言語を操る日本語学習者と日本語母語話者の日本語使用上の違いとそれに伴う日本語非母語話者と日本語母語話者の「誤用」の違いも漸次明らかになっていくに違いない。

いままでの誤用研究資料に基づけば、日本語非母語話者の誤用はほぼ、①脱落(omission)、②付加(addition)、③誤形成(misformation)、④混同(alternating)、⑤位置(misordering)、⑥その他の６種類において生じるというが(市川2000)、このような誤用はやはり日本語学習者の初級・中級段階における誤用であると思われる。それに対して、日本語母語話者の誤用はたいてい敬語、慣用句、接客の言葉、

16) 注２)の学会は関西学院大学の于康氏が作った学会であるが、于康氏の母語は中国語である。そして、「宿題する」という表現はたまたま韓国の大学日本語教科書で見つかったものであるが、日本語コーパスにもこのような使い方が10数件ヒットされていた。また、「名が聞こえる」という表現は中国で出版された教科書に７回で出ていたが、コーパスで調べたら、１件だけあったものの、確実に日本語母語話者によって使われていることは間違いない。

17) この点についてはもう少し厳密な検証をする必要があるが、経験的に初級や中級の学習者は自分の口から出た言葉に対して、すぐにはその正誤の判断ができないと思われる。

www.kci.go.kr

若者言葉、ら抜き言葉などに多く見られるようであるが、これらの誤用は大まかに言えば、１つは言葉の意味を勘違いして使用の際に妥当さを欠いているもの、２つ目はとくに敬語や接客の言葉といった対人関係の表現において犯すもの、３つ目は「ことばの乱れ」といわれる若者言葉である。とすると、日本語母語話者の誤用には少なくとも市川(2000)で指摘されている日本語非母語話者の犯すような誤用はないか、きわめて少ないであろう。

要するに、書き言葉に限って言うならば、初級や中級の日本語非母語話者と日本語母語話者の誤用の違いは、前者はほとんど文法の間違いであるのに対して後者は言葉の意味の勘違いや言葉の変化の過程における、伝統的な言葉の運用規則からはぐれた使い方ということができよう[18]。ただ、前にも指摘したように、日本語非母語話者であっても日本語のレベルが上級以上ひいては日本語母語話者に接近していることもあり得るので、一概に日本語非母語話者と日本語母語話者の日本語の「誤用」の違いと決めつけるわけにはいかず、その結論はこれからの研究に譲りたい。

## ４.「二次誤用」仮説

外国語学習において誤用はつき物である。それは、外国語の学習過程において誤用は避けて通れない魔物だからである。しかし、一口に外国語学習といっても教える側の母語別、専門教育程度、教え方や資質、教わる側の母語別、学習意欲や資質等により、その習得結果には大きな違いが見られるに違いない。例えば、中国国内における日本語学習と日本における日本語学習は学習環境、教師や教え方等に大きな差があり、その結果としての学習者の習得状況は推して知るべきである。前述したように、日本における日本語教育はほとんど日本語を母語とする日本人教師によって行われているのに対して、外国における日本語教育は人数に限りのある日本人教師を除いてはほとんど日本語非母語話者によって行われる。もちろん、日本語教育に際して、日本語母語話者と日本語非母語話者にはそれぞれの長短所はあるが、日本語母語話者は少なくとも間違った日本語を教えたりはしないだろう。半面、日本語非母語話者の日本語教師は必ずしもそうではない。そこで、場合によっては間違った日本語を学習者に教え、学習者はその間違った日本語をそのまま覚え込んで使ってしまう恐れが生じてくるわけである。また、いろいろな日本語学習書や研究書に間違った表現も多かれ少なかれ日本語学習者の「二次誤用」を来たす導火線と十分になり得るのではないだろうか。

一般的に大学等正規の日本語教育機関で日本語を教える日本語教師は特別なケースを除いては、少なくとも４年生大学日本語学科以上を卒業しているだろうし、中には日本やその他の国で日本語関係の修士号や博士号を取得している教師もかなり多い。中には、日本語母語話者に近い日本語レベルを有している教師もいると思われる。しかし、話し言葉と書き言葉ともに完璧に日本語を使いこなす人は、皆無に近いと考えたほうが合理的である。だとすれば、日本語教育現場で、あるいは日本語教科書を作ったりする場合、すべて正しい日本語の表現を使うということはまず無理であろう。言い換えれば、「二次誤用」は日本語非母語話者の日本語教師あるいは研究者に不完璧な日本語によって生じるものと考えることができよう。

---

18) この点についてはもう少し厳密な検証をする必要があるが、経験的に初級や中級の学習者は自分の口から出た言葉に対して、すぐにはその正誤の判断ができないと思われる。

www.kci.go.kr

中国における「二次誤用」の可能性について、①中国で出版された大学日本語学科の教材としてかつて用いられていたか、または現在でも用いられている教科書の誤用、②日本に関する日本語で書かれた研究書籍における日本語の誤用、③日本語の誤用を取り扱った専門書の３つに分けて考察してみたい。

### 4.1 日本語教科書における誤用

前にも言及したように、中日翻訳も訳者が日本語非母語話者であれば、その日本語の誤訳をやはり誤用と同様に取り扱ったようが適切であると思われる。まず、次の誤訳の例を見てみたい。

⑴ 他想喝水。
　日本語訳：彼は水がほしがっている。 →水をほしがっている。(筆者修正、以下同)
⑵ 外面走进来一个四十来岁的男人。
　日本語訳：そとから四十才ぐらい男が入ってきた。 →ぐらいの男→ぐらいの男
⑶ 老师让学生做作业。
　日本語訳：先生は生徒に宿題を作らせる。 →宿題を作らせる→宿題をやらせる

例(1)から(3)は1980年代の半ばに中国で中日翻訳の教科書として出版されたものであるが、この教科書には200文以上の日本語訳の間違いまたは日本語らしくない表現が見られた。にもかかわらず、当時は改革開放以降、中国で初めて出版された中日翻訳に関する教科書だったせいか、第二版まで出版される予定だったという[19]。このような「間違いだらけ」の翻訳教科書を使えば、弁別力のない日本語学習者は当然間違った日本語をそのまま覚え、使ってしまうに違いない。

⑷ 「易姓革命論」は中国歴史の発展の中で、大きな影響を果たした。
⑸ 日本人の文化生活を豊富させた。
⑹ 異国との往来を繁栄にさせた。
⑺ 稲の耕作は、水田の開発、水利の維持管理には、より多くの人々の結合が必要であり、
⑻ この頃の和歌は、題材も拡大し、
⑼ 初め大海人皇子に寵され、後に天智天皇と結婚。

例（4）と（5）は日本語文学史のテキスト[20]、例（6）と（7）は日本文化概論のテキスト[21]、例（8）と（9）は古典文学作品選読のテキスト[22]からそれぞれ見つかった誤用であるが、例（7）は言葉の間違いではなく、内容の間違いである。これらの誤用は例（1）から（3）のように教科書ではなく、理論書なのでその影響は比較的に大きくはないものの、やはり日本語学習者に「二次誤用」を引き起こさせる可能性は十分にある。

---

19）この本は1986年北京大学出版社から出版された『漢訳日基礎教程』（遅軍編著）であるが、1989年筆者がその中の一部の誤訳について論文にまとめて『日語学習与研究』誌に掲載したところ、著者が同年同誌に反論文を書いて掲載したところによれば、第二版の出版予定があったそうである。
20）李光泽主编、『日本文学史』（第二版）、大连理工大学出版社、2012年。
21）韩立红编著、『日本文化概论』（第二版）、南开大学出版社、2006年。
22）高文汉编著、『日本古典文学作品选读』、上海外语教育出版社、2006年。

www.kci.go.kr

## 4.2 日本研究の著書に見られる誤用

(10) 亡命などの目的で日本へやっていった人も、
(11) 実際、新刊した本の中に、
(12) 民族文化の発展に独特な貢献をささげた。
(13) 意味の教育をもっと重要視されなければならない…
(14) 第三章は語彙理解の実態について述べる。

例 (10) から (12) までは中日近代語彙の交流に関する研究書[23]、例 (13) と (14) は日中動詞に関する研究書[24]の誤用であるが、例 (4) から (9) と同じように、二次誤用の導火線になり得るであろう。

## 4.3 日本語の誤用を取り扱った著書の誤用

(15) あの山の上には梨の木が一番多いです。 (×)
あの山（の上）では梨の木が一番多いです。 (○)
(16) 冬休みに会ってから今までもう二ヶ月たちました。 (×)
冬休みに会ってから今になってもう二ヵ月たちました。 (○)
(17) 私の心を強く打たれた本はこの外にありませんでした。 (×)
私が心を強く打たされた本は、この外にありませんでした。(○)

例 (15) から (17) までは前出の1980年代半ばに中国の研究者によって中国語で書かれた中国語母語話者の日本語の誤用を取り扱った最初の著書であるが[25]、皮肉なことに誤用を訂正(correction)したつもりのものが、かえって誤用を犯すというケースである。換言すれば、ミイラ取りがミイラになるというようなものである。こうなると、二次誤用どころか、三次誤用も四次誤用も危ぶまれるのではないだろうか。

(18) 9月15日、アメリカ軍が朝鮮の西海岸で上陸し、朝鮮人民軍に対して攻撃を始めた。 (×)
9月15日、アメリカ軍が朝鮮の西海岸に上陸して、朝鮮人民軍に対して攻撃を開始した。 (○)
(19) 人民解放軍の猛攻に会い、敵は打ちひしがれざるを得なかった。 (×)
人民解放軍の猛攻を受けて、敵がさんざんに打ちひしがれたのは当然である。 (○)

例 (18) と (19) は『日語誤訳文分析』[26]、つまり間違った中日翻訳または日中翻訳を取り扱った著書であるが、例 (15) ～ (17) と同様に、誤用を直したつもりのものがかえっておかしい日本語表現になるといった間違いを犯している。

---

23) 李運博著、『中日近代詞汇的交流』、南開大学出版社、2006。
24) 李頴清著、『日中動詞比較研究』、南開大学出版社、2010年。
25) 胡振平編著、『日語病句剖析二百例』、上海訳文出版社、1985年。
26) 張麓営主編、『日語誤訳文分析』、浙江工商大学出版社、2013年。

www.kci.go.kr

この他にも、中日対訳辞書の日本語の間違いなど、「誤用だらけの」辞書も少なくない。このように、中国母語話者の研究者によって書かれ、中国で出版された日本語や日本関係のテキストや参考書、日本に関する研究書並びにその他の書き言葉における間違った日本語の表現は実に多く、これらの間違った表現は次世代の日本語学習者に「二次誤用」を産出させる十分な根拠になり得る。それは、学習者は受動的で、間接または直接的にある間違った日本語表現に出会ったとき、正否の判断能力に欠けているので、そのまま受け入れ、消化することが十分あり得ることだからである。この点は日本語能力が不十分な日本語教師でも変わらず、教育現場で間違った日本語を学生にそのまま教えることも十分に予測される[27]。

## 5. 日本語レベルのランク付けと「疑似誤用」[28]仮説

### 5.1 日本語レベルのランク付け

日本語教育において学習者の日本語レベルを評価する際に、初級、中級、上級などとレベルのランク付けがしばしば行われ、最近は「超級」(金澤2006：2)や「上超級」(後藤2012：61)ということばさえ研究論文に見られるが、このランク付けに関する明確な基準は管見の限りまだないようである。もちろん、毎年世界各地で一斉に実施されている日本語能力試験が１つの目途になっていて、この日本語能力試験の最上級であるＮ１（旧1級）にパスすれば、とりあえず上級レベルと判定できよう[29]。しかし、現実的にはＮ１にパスした学習者であっても必ずしも正しい日本語を使いこなせるわけではない。この点は李（2009）で指摘した中国人日本語教師や研究者の手によって書かれた日本語教科書、学習書や著書・論文に見られる「間違いだらけ」の日本語を見ても明らかである。そもそも大学で日本語を教えたり、研究機関で日本語を研究したりしている人たちの日本語レベルはＮ１レベルどころか、「超超級」のはずである。にもかかわらず、彼らによって書かれた日本語のテキストやその他の書籍、論文に日本語の誤用や日本語らしくない表現が至る所に散見されている現実をどのように考えればいいのだろうか。

この事実に基づいて考えるならば、このような「超級」、「超上級」や「超超級」の日本語非母語話者の日本語の誤用に対しても初級～上級の日本語学習者と同じ延長線上で考えるべきであり、入門・初級からはじめ、日本人並に日本語を使いこなせる段階に至るまで、日本語レベルのランク付けをする必要があろう。そのうえレベル別と母語を同じくする日本語学習者（あるいは日本語習得済みの外国人）別に分けて誤用データを収集・分析し、体系的にその誤用対策を講じるのが本筋であろう。実は、話し言葉に限られているが、荻原等(2001)のように、「上・超級日本語学習者」の日本語発話について被験者のレベルを、上級の下→上級の中→上級の上→超級→母語話者の順にランク付けする研究もある。

ところで、白川（2007）では日本語学習者による日本語能力試験の１級・２級の項目の誤用を取り上げ、「どれも初級で学習する項目だが、上級・超級の学習者でも誤用・非用が目立つ」とし、「上の

27) 大分前の話であるが、以前勤めていた大学で他の教師の授業参観ということで、ある教師の日本語の授業を聞きに行ったところ、教科書に書かれている間違った文法現象をそのまま教えていたので、休みの時間にその教師に話したら、ああ、そうですかと受け流されたことがある。

28) この用語も李（2017）によって初めて提起されたものである。

29) 後藤（2012）では、Ｎ１（旧1級）レベルの学習項目を習得した学習者を「超上級」としている。

www.kci.go.kr

レベルの学習者にとっても、むずかしいのは初級で出てくる文法項目のようである」(P.176)と指摘されているが、実例から見てやはり初級段階に犯す誤用と上級・超級段階に犯す誤用は部分的には一致するものがあるとは言え、全体的にはその誤用実態は異なると思われるが、この点についてはもう少し具体的なデータによる裏付けが必要である。

## 5.2 「疑似誤用」仮説

前掲の市川保子でも指摘されているように、誤用には段階性がある。その１つは文法的な正確さ(accuracy)に関わるものと、もう１つは文章・談話としての適切性(adaptability)に関わるものであるが、前者は明らかな文法的な間違い、後者は文法的には間違っていないが、どことなく不自然さが目立つ文である(p.14) 。例えば、「鳥を飛ぶ」、「底線を引く」、「いいだと思う」等のような使い方は誰が見ても明らかな文法的な間違いであり、いわゆる「文法的な正確さ(accuracy)に関わるもの」であろう。一方、過剰敬語やことばのゆれ、あるいは何らかの意図で規範的な日本語を使わない「を気づく」[30]のような表現は「適切性(adaptability)に関わるもの」であろう。

ということは、外国語の学習において母語(first language)から目標言語(target language)にいたるまでの過程における段階性が認められるが、その段階の１つとして「擬似誤用」という仮説を立てることができるのではないだろうか[31]。例えば、「軸心国家」、「三大画期」、「名が聞こえる」、「重要性が見える」というような複合語やコロケーションは文法的な間違いもないし、その表そうとする意味も大体わかるが、不自然さが目立つ表現である。もちろん、この問題は「表現の一般性」[32]理論とも関わっているが、要は正しいかどうかの判断基準がないことである。それは、辞書や学習書にもこのような難しい表現はふつう出てこないし、コーパスにもほとんど現われていないからである。とりわけ、「疑似誤用」という仮説が成り立つとすれば、それは複合語以上の言語単位、とりわけコロケーションにおいてよく見られる現象である見ることができる。

大曾・滝沢(2003)によれば、学習者の犯すコロケーション違反は一般的に３種類に区別されるといわれている。その１つは、「曲がった年」のように、「現実世界との照合が可能なコロケーション」で、このような誤用は言語を問わず、論理的に成立不可能な表現である。２つ目は、big lossesとheavy los-

sesのように、共に可能なコロケーションであるが、一方が他方よりも好まれるといった事例、そして3つ目はmake an attemptとhave a tryは共に成立可能であるのに対して、make a tryとhave an attemptはコロケーションを成さないといったコロケーション違反である。つまり、1番目は論理的に成立しないもの、２番目は両方とも成立可能であるが、どちらの表現が一般的に好んで用いられるかという選択肢の問題、３番目は語と語の共起で、日本語学習者にとっては２番と３番が習得しにくいと思われる。

例えば、次に列挙する複合語が中国で出版された日本語で書かれた著書から見つかったものである

---

30) 李(2018)を参照されたい。

31) もし、このような表現が日本語非母語話者によってのみ用いられるようであれば、ある意味では「中間言語」に相当するかもしれない。

32) 李在鎬等(2012)では、「日本語母語話者といっても、その言語直観の範囲は限定的なもので」、「自分でよく使う表現のつもりであっても、一般的にはあまり言わないような言い方だったり、反対に自分はあまり言わない言い方であっても、一般的にはよく使う言い方だったりすることはよくある」(p. 6)指摘し、一般的に多くの母語話者によって使われている表現を「表現の一般性」としている。

www.kci.go.kr

が、間違った使い方かどうか、一言で言いきれないものが多い。

(20)軸心国家、軸心時代、三大画期、思惟方式、共同心理、衣食住行、天地創立、権利中心、最高権利者、貴族専制、人生観照、回想述懐、戦乱頻繁、古典文学双璧、平易大衆的、天災地異、教育工程、教授論、パターン体系……。

これらの複合語は文法的には誤用とは言えないが、感覚的にどうもおかしい表現であるような気が確かにする。しかし、なぜおかしいのかと言われると答えにくい。それは、そのおかしさを裏付ける根拠が日本語の学習書や参考書にもないし、使用頻度もかなり低い複合語なのでコーパス[33]にもほとんど出てこないからである。

複合語と同じように、次に列挙するコロケーションも中国で出版された日本語で書かれた著書から見つかったものであるが、その正否をどう判断すべきだろうか。

(21)成立を成し遂げる、歴史を述作する、才能が出される、影響が存在する、名が聞こえる、友好を高める、影響を果たす、細かい指導を実現化できる、盛んに受容する、範囲が広大で、隆盛期に達する、融合を行う、征服を受ける、影響を発掘する、稲作を栽培する、あつれきを起こす、深く存する、万葉ぶりの作品が生じる、発表を停止する、独自の文学を生産する、隆盛を呈する、現象を形成する、歴史を送る、教育効果を高くする、貢献を尽くす、研究を重みにする、重要性が見える……。
(21)の中で、「影響が存在する」、「名が聞こえる」、「重要性が見える」の３例だけは例のコーパスで１例ずつ見付かっている[34]。
(22)現存する悪影響が存在しないと仮定したときに節約しうる費用などが、「環境の社会的費用」の算出方法として、　上岡直見『クルマの不経済学』(1950)
(23)紫式部の古典教養さて、京都の人で世界中にその名が聞こえている人といえば、誰を挙げることができるだろうか。　仲尾宏『京都の渡来文化』(1990)
(24)リードが勝敗の行方を左右するとも言われているが、ゲーム中では今ひとつ捕手リードの重要性が見えてこない。 加藤明洋『プロ野球チームをつくろう！2公式完全ガイド』(2003)

しかし、コーパスにあるからそのまま正用であり、コーパスにないから非正用であると言い切れるだろうか。コロケーションというのは、簡単に言えば言葉と言葉の結合であるが、それにはもちろん結びつきの言語的制約があるに違いない。そこで近年コロケーション辞典が出版されたりしているが、コロケーション辞典とで言葉と言葉のすべての結びつきを取り上げることはできない。したがって、このような主として日本語非母語話者によって書かれている何とも言えない微妙な日本語の表現を「疑似誤用」として位置づけ、それに相応した理論を構築するのも日本語の誤用研究に資するものであると筆者には思われる。

33) 大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所と文部科学省科学研究費特定領域研究「日本語コーパス」プロジェクトが共同で開発した『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（BCCWJ）を指す。
34) BCCWJには「悪影響が存在する」は出ているが、「影響が存在する」は出ていない。

www.kci.go.kr

## ６．おわりに

以上、これまで日本語の誤用研究であまり話題にされなかった日本語母語話者の誤用と日本語非母語話者の誤用の異同、「二次誤用」仮説、「疑似誤用」仮説の３つの問題をメインテーマにして中国語母語話者の誤用と誤用分析を中心に私見を述べてきた。この中で「二次誤用」仮説と「疑似誤用」仮説は筆者が折に触れて日本語の誤用について考えたり論文を書いたりしている過程で気が付き、その後自分なりの誤用分析の成果としてまとめて論文集や口頭で論じたものである。このような仮説はふつう日本における日本語教育では話題にのぼるはずもなく、したがって理論的にも実践的にもかかるような研究が行われていないのが現状である。

ところが、日本語教育は単に日本においてのみ行われているのではなく、日本以外の多くの国や地域で行われているので、その際にどのような教育上の問題が生じ、それを理論と実践の両サイドからどう解決していくべきかということにも目を向ける必要がある。それでこそはじめて日本語教育の全体像が見えてくるはずだし、それに即した新しい日本語教育理論や教授法も構築されていくだろう。

ただ、本稿で論じたこの３つの論点は日本語の誤用に関する研究分野においてまだ未開拓の斬新な課題であるので、これからもう少し緻密なデータによる検討や実証が必要であることは言うまでもない。しかし、日本語教育の研究において日本における日本語教育と日本以外の国における日本語教育を分けて考えるべきという筆者としては、ある面から言えば、中国における日本語の誤用と誤用分析はかなり特異的な性質を持っているように思えてならない。それは一体どういうもので、どうしてこのような特異性が生まれ、この特異性をどうように位置付け、それを解決するためにどのような対策を講じるかという問題が浮き彫りにされてくる。これらの諸問題は今後の課題として考えていきたい。

**【参考文献】**

石綿敏雄・高田誠(1990)『対照言語学』おうふう
市川保子(2000)『(続)日本語誤用例小辞典』凡人社
大曾美恵子・滝沢直宏(2003)「コーパスによる日本語教育の研究」『日本語学』22巻５号pp.235-244
荻原稚佳子等(2001)「上・超級日本語学習者における発話分析一発話内容領域との関わりから」『世界の日本語教育』11 pp.83-102
王忻(2008) 『中国日語学習者偏誤分析』外語教育与研究出版社
金澤裕幸(2006)「誤用分析研究の可能性」『横浜国大日語研究』第24号pp.1-8
_____(2008) 『留学生の日本語は未来の日本語』ひつじ書房
北原保雄(2002)『明鏡国語辞典』大修館書店
金田一春彦(1976)「国語動詞の一分類」『日本語動詞のアスペクト』麦書房 pp.5-26
国広哲弥(2010)『新編日本語誤用・慣用小辞典』講談社 現代新書
月刊言語編集部(1983)『月刊言語』３特集「誤用の文法」大修館書店
顧海根・徐昌華(1980)「中国人学習者によくみられる誤用例―疑問詞用法と受身文を中心に―」『日本語教育』41
顧海根(1981)「中国人学習者によくみられる誤用例(二)―動詞、形容詞、代名詞などを中心に―」『日本語教育』44

www.kci.go.kr

_____(1983)「中国人学習者によくみられる誤用例―格助詞、係助詞『も』、接続助詞『て』などを中心に」『日本語教育』49
藤理恵（2012）「日本語超上級レベルのカリキュラム・デザイン―『総合科目』活用の事例から」『同志社大学日本語・日本文化研究』第10号pp.61－78
小柳かおる(2010)『日本語教師のための新しい言語習得概論』スリーエーネットワーク
佐治圭三(1980)『中国人の日本語の作文に見られる誤用例集』国際交流基金
徐宝妹・許慈恵（1995）『留日学生日語錯句解析』上海外語教育出版社
白川博之(2007)「学習者の誤用・非用をどう考えるか」『広島大学大学院教育学研究科紀要』第二部第56号
長友和彦(1991)「誤用分析の現実と課題」『広島大学留学生センター紀要』1号pp.23-40
日本語学編集部(2009)『日本語学』vol.28-9特集「間違った日本語」、明治書院
日本語誤用・日本語教育学会「中国語母語話者日本語学習者にかかわる誤用研究の主な文献」http://yukang.org/index1.html
藤田昌志（2007）『日中対照表現論―付：中国語を母語とする日本語学習者の誤用について―』白帝社刊
_____（2010）「日本語を母語とする中国語学習者の誤用について」（中国語教育学会第６回全国大会、2008年６月８日、於北九州市立大学）
穂積晃子著、顧海根・李強訳（1987）『中国人日語常見病句分析一百例』科学普及出版社
吉川武時（1982）「誤用分析Ｉ」『日本語誤用分析』（1997）に所収、明治書院pp.2-53
李在鎬・石川慎一・砂川有里子（2012）『コーパス調査入門』くろしお出版
李東哲(1989)「试析《汉译日基础教程》中的误译」『日語学習与研究』第五期 pp.24－29
_____(2009)「中国で出版された日本語書籍における言葉の間違いについて」『日本文化論叢』大連理工大学出版社pp.517－530
李東哲・徐瑛（2011）「中国で出版された教科書類に見られる日本語の誤用について」西安外国語大学開催の「『日語教学与教材』国際学術研討会」における口頭発表
李東哲(2011)「誤用・誤用分析と日本語教育」『日本文化叢書』第六輯　pp.002－013
_____(2015)「中国日本語教育におけるもう一つの問題点」『東アジア日本語教育・日本文化研究』第十八輯 pp.45－62
_____(2017)「外国語教育における「２次誤用」試論」『日语文化论丛』第七辑　pp.117-128
_____(2018)「コーパスの用例に基づく『を気づく』の使われ方について―『～を気づく』の他動性用法を中心に―」『日語日文学研究』第105輯1巻　pp.65－86
胡振平(1986)『日語病句剖析二百例』上海訳文出版社
Corder,S.P.（1967)“The Significance of Lerners’Erros”IRAL,5
Corder,S.P.（1971)“Idiosyncratic Dialects and Error Analysis.”IRAL,9,2
Etherton,A.R.B(1977)“Errors Analysis:Problems and Procedures”ELTJ,32
市川保子(不明)「日本語・日本語教育を研究する　第16回日本語の誤用研究」（www.jpf.go.jp/j/.../japanese/teach/.../tushin40_p14-15.p...〈2019年12月25日調べ〉）

www.kci.go.kr

〈 요 지 〉

## 중국어 원어민의 일본어 문어의 오용 연구 서설

외국어 습득 과정에 있어서 오용은 불가피하다. 따라서 이러한 오용을 제때에 찾아내고 분석하여 외국어교육 실천과 이론에 응용하는 것은 학습자들의 외국어습득에 큰 도움이 된다고 사려된다. 단 외국어 학습은 학습자가 사용하고 있는 모어와 밀접한 관계가 있기때문에 모어별로 어떤 외국어 학습 방법을 모색하는 것이 바람직하다.

본 문은 중국의 일본어교육에 있어서의 오용 문제를 다룬 논문이다. 단 구체적인 요용이나 오용분석이 아니라 중국어 모어화자 일본어연구자들이 일본어 사용 과정에서 어떠한 오용문을 산출하고 이러한 오류가 일본어교육에서 어떤 양상으로 표출되며 그 자리매김을 어떻게 할 것인가에 대하여 "2차 오용 (二次誤用)"가설과 "의사 오용 (疑似誤用)"가설을 주제로 서술했다. 이 두 가지 가설은 지금 현재 이론적인 증명이 빈약하지만 특히 중국의 일본어교육에 있어서는 성립 가능성이 충분히 있다고 사려되며 이러한 가설은 일본어 오류분석 연구에 이론적인 근거로 될 수 있다

논문 분야 : 일본어교육
키워드 : 중국의 일본어교육, "2차 오용", "의사 오용", 일본어오용, 오용분석

▣ 이동철(李東哲)
신라대학교 교원
ritoutetu@163.com

■投稿日 : 2019년 12월 28일
■審査開始 : 2020년 2월 5일
■審査完了 : 2020년 2월 19일
■掲載確定 : 2020년 2월 28일

www.kci.go.kr